

一 般 演 題 抄 錄

29. 左冠動脈前下行枝と回旋枝の2枝に同時に発症したと考えられる急性心筋梗塞の1例

元木康一郎 木村彰男 谷和孝昭 松浦真宜 黒岡京浩

井川寛 林孝浩 金政健 石川欽司

近畿大学医学部第1内科学教室

急性心筋梗塞の発症11時間後の緊急冠動脈造影にて左冠動脈前下行枝と回旋枝の閉塞を認め、2枝の同時閉塞により発症したと考えられた症例を報告する。症例は79歳の女性で、2000年2月12日胸痛と背部痛にて外来受診した。心電図ではI, aV_L, V46にST上昇を認め緊急CAGを施行した。左前下行枝segment 8に100%閉塞、回旋枝segment 13に90%狭窄とsegment 14の100%閉塞が認められた。IVCR施行しsegment 8 segment 13共に0%へ改善し、segment 14にPTCA施行、0%に改善した。左室造

影では、前壁領域の無動を認めた。発症後2週間後に施行された²⁰¹Tl-Clでは側壁への集積低下、¹²³I-MIBGでは心尖部に集積低下を呈しており、前壁と側壁両方の梗塞が考えられた。患者は1999年12月より間質性肺炎増悪のため外来通院中であり2月8日よりステロイド治療を開始していた。発症機序としては血管炎による冠動脈の内皮傷害、vasospasm、ステロイド内服および心筋梗塞発症時の凝固能亢進などが考えられた。

30. 抗凝固剤アルガトロバンの血管内皮細胞に対する影響

上嶋繁 深尾偉晴 岡田清孝 松尾理

近畿大学医学部第2生理学教室

アルガトロバンは特異的な抗トロンビン作用を有する合成アルギニン誘導体であるが、血管内皮細胞に対する作用については未だに不明な点が多い。そこで、アルガトロバンの血管内皮細胞に及ぼす影響を、その抗血栓性の一部を担っている線溶活性を中心に検討した。さらに、血管内皮細胞存在下におけるスタフィロキナーゼ (staphylokinase: SAK) の活性におよぼすアルガトロバンの影響についても検討を行った。スタフィロキナーゼは黄色ブドウ球菌由来の線溶系活性化剤であり、血液中のプラスミンと結合して plasminogen activator (PA) 活性を発現する。血管内皮細胞として、クローン化され継代培養の可能な TKM-33 cells を用いた。1 U/ml のトロンビン刺激の前または後に血管内皮細胞をアルガトロバンで処理した。アルガトロバンは血漿中の治療域濃度と考えられる 1 µg/ml を含めて、25 µg/ml までの濃度を用いて実験を行った。トロンビン刺激後にアルガトロバンで処理しても血管内皮細胞の有する PA 活性や血管内皮細胞存在下での SAK 活性

に有意な変化は認められなかった。しかし、トロンビン刺激前にアルガトロバンで処理しておく、血管内皮細胞の有する PA 活性や血管内皮細胞存在下での SAK 活性はアルガトロバンの濃度依存性に増強した。培養液中の u-PA 活性も増強していた。PA のインヒビターである PAI-1 抗原量はトロンビン刺激後のアルガトロバン処理で増加したが、トロンビン刺激前のアルガトロバン処理でその増加は認められなかった。生体分子間相互作用解析装置 (IASys) を用いることによって、アルガトロバンが血管内皮細胞の表面に結合することが示された。以上より、トロンビン刺激により血管内皮細胞からの PAI-1 分泌が増加し、これが PA 活性の低下および SAK 活性の低下の一因となることが明かになった。しかし、あらかじめ血管内皮細胞をアルガトロバンで処理しておくことにより、このトロンビンの作用は阻止され、血管内皮細胞の抗血栓性が維持されるものと考えられた。